



アルバータ大学

ESL・ESTプログラム、事務系職員海外実務研修



8月～9月



昨年度から開始されたアルバータ大学(カナダ)ESL(English as a Second Language)プログラムに加え、本年度は新たにEST(English for Science and Technology)プログラムと事務系職員海外実務研修が実施されました。

ESLプログラムは、英語でのコミュニケーション能力の向上と異文化理解を目的としたものであり、ESTプログラムは、科学分野でのコミュニケーション能力の向上を目的とした専門性の高いプログラムです。事務系職員海外実務研修は、事務職員の語学能力の向上と多様な価値観の理解及び幅広い視野を持つことを目的として実施しています。

本年度はESLプログラムに29名、ESTプログラムに7名の学生と、実務研修に2名の事務職員が参加しました。渡航前に受講した英会話レッスンやプレゼンテーション講座等の事前準備を生きながら有意義な研修となりました。

ESLプログラム

英語が学問から言語に 変わった瞬間

8月15日～9月6日

工学部 電気電子・情報工学科 1年
加藤 満基



過去に留学した経験がありましたが、最初は緊張と不安で言葉が中々出てきませんでした。そんな中、文法にこだわらず笑顔で会話する人達を見て、自分が正しい英語を意識しすぎていたとハッとしました。人とのコミュニケーションで重要なことは、言葉が正しいかどうかではないのだと改めて気付かされました。その後は、とにかく会話をするよう気持を切り替え、周囲を見る余裕もでき、カナダの雰囲気を楽しめました。自分の言葉が伝わるのが嬉しくてたくさんの人たちと話しました。思っているだけでなく行動する力が大切だと強く感じました。

カナダは多国籍で大らかな国です。神秘的な大自然があるのが特徴で、そこに住む人達も明るくフレンドリーです。最終日にホストファミリーから「帰って来てね」と言葉をもらい、子ども達が寂しそうに抱きついてきてくれた瞬間、充実した3週間を送れたと心から感じました。この留学を支えてくれた全ての人に感謝しています。



New ESTプログラム

カナダ・アルバータ大学への 留学を終えて

8月15日～9月23日

自然科学技術研究科 修士1年
加藤 瑛那子



6週間のカナダ・アルバータ大学での生活は、とても刺激的で充実したものでした。ESTプログラムは研究室に配属されるという点が特徴的で、また、アルバータ大学は留学生を多く受け入れていることから、配属先の研究室もほとんどがカナダ以外からやってきた学生でした。PhDの一人であるインド人が伝えてくれた言葉があります。「学ぶために学ぶ。君もそのために英語を学んでいるのでしょうか。周りに迷惑をかけるなんて気にする必要はない。学んで、学んで、学べばいい。」英語も未熟で研究について議論できるレベルでなかった私にとって、彼の言葉はとても響きました。国外から学ぶために集まった彼らは学ぶことにとっても積極的で、人が学ぶことに対してとても寛容でした。修士になり何のために研究をするのか考え悩んでいた私にとって、彼らの姿や海外の研究に対する考え方、システムを学んだことは、今後の私の将来に大きく影響することは間違いありません。



New 事務系職員海外実務研修

事務職員の留学

8月15日～9月5日

医学部附属病院事務部
大竹 博和



アルバータ大学ESLプログラムに参加した学生とともに職員海外実務研修として参加しました。本研修は現地職員と意見交換を行い、さらに現地の英会話レッスンを受講しながら英会話能力の強化を目的に今年度から開始されました。学生引率や支援業務も含まれ、仕事以外の日常でも英語のみで会話をしなければなりません。移民の国であるカナダの人々は、相手の思いを尊重する傾向があり、こちらが拙い英語で話してもしっかりと耳を傾け相手に合わせて会話をしてくれます。このような、コミュニケーションを取れたという手応えや、カナダとの異文化交流を通じて、学生も職員も充実した毎日を過ごせました。日本では体験できないこの貴重な経験は、今後の事務職員の国際化を視野にいれるうえで必須であると感じました。



海外留学フェア

4月18日

留学に必要なとされる語学力や、本学における留学プログラムに関する情報提供及び留学の促進を目的に、「岐阜大学留学フェア」を開催しました。国際教育交換協議会及び公益財団法人日本英語検定協会の担当者による、英語能力試験 (TOEFL iBT及びIELTS) が国際的な語学基準として利用されていることや試験の特徴について説明後、留学した学生による海外生活を通して生まれた変化、多様な文化の発見、国際的なネットワークの構築

等、貴重な経験の発表がありました。部局実施プログラムや、留学時の医療的準備と自己健康管理の説明が保健管理センターよりあり、70名の参加者は熱心に聞き入りました。



危機管理オリエンテーション

7月11日

海外渡航時の危機管理オリエンテーションを開催し、約80名の学生と教職員が参加しました。本オリエンテーションは、留学や海外旅行を予定している学生などを対象とし、事件や事故に巻き込まれないための意識啓発だけでなく、健康管理なども含めた幅広い危機管理意識の醸成を目的としています。

本年度は海外留学生安全対策協議会の服部誠理事を講師に迎え、海外で発生した事案や治安に関する情報、山本真由美保健管理センター長による渡航医学、予防接種を含む留学準備、及び日本と海外との医療や保険制度の比較などについての講話がありました。参加者は、日本での生活では普段意識することの少ない注意点や情報を得ることができました。



サマースクール(受入)

6月27日~7月25日

本学の学術交流協定大学の学生を対象に毎年開講し、本年度で31回目となるサマースクール(受入)を実施しました。カセサート大学(タイ)、ノーザンケンタッキー大学(アメリカ合衆国)、マレーシア国民大学(マレーシア)、電子科技大学(中国)、広西大学(中国)、木浦大学校(韓国)から計13名の学生を迎え、日本語学習の他に日本文化体験として関市(刃物産業)、土岐市(陶芸体験)、郡上市(ホームステイ)を訪問しました。また、能楽(能・狂言)体験や相撲観戦といった多彩なプログラムも提供されました。

参加学生達は、日本人学生チューターと共に約1か月間、本学学外合宿研修施設に宿泊し、食事や勉強等、生活を共にすることで深い絆を築きました。



三大学連携 学術シンポジウム

4月14日

岐阜市内で行われたサラマンカ大学(スペイン)創立800周年記念事業において、サラマンカ大学リカルド・リベロ・オルテガ総長一行を迎え、サラマンカ大学・岐阜薬科大学・岐阜大学三大学連携学術シンポジウムを開催し、古田肇岐阜県知事立会いのもと、三大学による学術連携基本協定を締結しました。

シンポジウムでは、「がん研究の最前線~がん克服に向けて(対がん)~」をテーマに三大学から各2名または3名が講演し、約110名の参加がありました。また協定式では、学術研究の交流

を推進するため、医学、薬学を中心に関連分野との連携を重視し、学際的な発展を目指す学術交流を行うことなどが合意されました。



マリアノ・マルコス州立大学 学術交流協定締結

9月10日

マリアノ・マルコス州立大学(フィリピン)と大学間学術交流協定を締結しました。協定締結に当たり、シャーリー・C・アグルピス学長とローダ・ベス・M・サントス准教授が来学し、本学学長室にて協定の締結式を行いました。アグルピス学長は本学大学院連合農学研究科を修了しています。

本協定に基づき、両大学間で生物生産、新エネルギー研究の領域における学生の相互派遣を通じた学生交流や、有機農業、減農薬生産、水資源管理及び技術研究、バイオエネルギー・システム開発に関する研究、農作業の自動化(ロボット工学、メカトロニクス)技術の開発等の領域における研究者交流が期待されます。



南フロリダ大学より30名の 学生が訪問

5月23~25日



南フロリダ大学(アメリカ合衆国)は学生数48,000、全米最大規模の州立大学で、2016年に同大医学学群と本学医学部及び保健管理センターの間に部局間協定が締結されました。今回、公衆衛生学部10名、オナーズカレッジ20名、同行教員3名が来学し、日本の国民健康保険制度や災害対策についての講義、看護学科学生78名とのウェルカムランチパーティーや医療英語講義、医学部附属病院見学、医学部箏曲部員と箏曲演奏、医療福祉施設見学、郡上市立八幡小学校での学校給食や校内清掃体験、そして長良川鶴飼見学と充実した体験をしました。来日学生全員が森脇久隆学長と握手を交わし記念品が贈呈されました。同大学との更なる交流の発展が期待されます。



見学、郡上市立八幡小学校での学校給食や校内清掃体験、そして長良川鶴飼見学と充実した体験をしました。来日学生全員が森脇久隆学長と握手を交わし記念品が贈呈されました。同大学との更なる交流の発展が期待されます。

カウナス工科大学来学

7月28日



駐日リトアニア大使ゲディミナス・バルブオリス氏、ヴィータウタス・マグナス大学アジア研究センター所長オウレリウス・ジカス氏、およびカウナス工科大学フォークダンスアンサンブル部「ネムナス」のメンバー52名が本学工学部を訪問しました。

一行は岐阜県主催の岐阜・リトアニア交流事業「リトアニアNOW」への参加を目的に来日し、前日のオープニングイベントではネムナスによる世界トップクラスのパフォーマンスが披露されました。

本学では、工学部副学部長小林智尚教授による工学部の説明と工学部グローバル化推進室長久米徹二教授によるアドバンスド・グローバル・プログラム(AGP)の紹介後、小林研究室、久米研究室及び毛利研究室を順に見学しました。その後の昼食会では、今後の一層の交流の発展について確認しました。



日本 夢が叶う 素晴らしい大学



工学研究科
ソナワネ・アモール・ダシャラス
Sonawane Amol Dasharath

インド

私は2016年10月に来日し、有機合成化学を研究されている瀧守先生の指導のもと、博士号取得に向けて研究しています。研究論文のプレゼンテーションでは、仲間と考えを共有し学ぶことで、研究活動がより意欲的なものとなっています。

留学先に日本を選んだのは、著名なノーベル賞受賞者が数多く輩出されているからです。また、日本の10校以上の大学が、世界の大学トップ200に選出されています。私もこの優れた学術組織の一員として科学に貢献したいと思います。海外で学ぶということは就職において有利ですが、とりわけ日本への留学は価値があると思います。独特の文化があり、治安が良く住み心地も快適で、公共交通機関は時間が正確で、食事はとても健康的です。

私は日本と母国インドの発展のために研究だけでなく、文化にも貢献したいと思っています。日本政府(文部科学省)奨学金の国費留学生であることを感謝します。まだまだ先は長いですが、ここでの旅を楽しみたいです。



勇気と行動で 夢を実現



連合農学研究科
フ・エーチン
傅慧珍

中国

私は傅慧珍(フ・エーチン)と申します。中国・広西大学の修士課程を修了し、2017年10月に来日しました。私にとって今回が初めての留学であり、遭遇するものすべてが新鮮です。来日当初は不安もありましたが、幸い研究室の仲間や先生、そして同郷の友人にも恵まれ、皆さんに助けてもらっています。

日本の文部科学省の奨学金には大変感謝しています。また、私の留学を後押しいただいた広西大学の于文進(ウ・ブンシン)先生にもお礼を伝えたいです。于先生は岐阜大学の卒業生です。

日本での生活にはすっかり馴染むことができました。岐阜大学は学ぶ環境が整っており、生活をするのも便利です。更に過ごしやすいするために、日本語や日本の文化をもっと学びたいと思います。

すべてが挑戦です。たとえ困難に直面しても、勇気を奮い起こせば奇跡が起こります。私は、研究者となって精力的に活動するためなら、努力を惜しみません。いつか私の研究が日本と中国の農業に貢献できればと思っています。





一般財団法人日本バイオインダストリー協会主催、岐阜大学共催で“未来へのバイオ技術”勉強会「北東インドの生物資源、食品バイオポリマー研究」～インド工科大学グワハティ校と岐阜大学の産官学共同展開～を開催しました。

かずさDNA研究所産官学連携推進センター長柴田大輔氏によるインド工科大学グワハティ校 (IITG) の所在するインド・アッサム州における生物資源の現状と将来展望についての概説後、IITGのバイマル・カティアール准教授によるSustainable Polymerの産業利用、同リンガラジュ・サファー教授による生物農薬と遺伝子組換え植物の産業利用、そして岐阜県教育委員会事務局教職員課長の北岡龍也氏による「国際協働教育 (Joint Degree等) が目指すもの」と題した講演を行いました。北岡氏は、元文部科学省高等教育局大学振興課長補佐として国際連携専攻に関するガイドライン策定に関与した経験から、本学が平成31年度に海外協定大学と開設する予定である4つの国際連携専攻 (ジョイント・ディグリープログラム：通称JD) の意義等について講演しました。

最後に、本学応用生物科学部小山博之教授が「インド工科大学グワハティ校と進めるJDプラットフォーム；インドの生物資源開発とグリーンエコノミー」と題した講演を行いました。



ジョイント・ディグリーによる国際連携専攻の設置に向けて

国際協働教育推進部門セミナー 「JD専攻の魅力」

4月26日

第1回 国際協働教育推進部門セミナー「JD専攻の魅力」を開催し、柴田大輔氏 (かずさDNA研究所産官学連携推進センター長) による講演「インド工科大学グワハティ校との国際連携食品科学技術専攻～産業界の視点から見た魅力と期待～」を行いました。

講演では、北東インドの中核大学インド工科大学グワハティ校との国際連携専攻が育成する人材と、国際的な産学連携プラットフォーム提供に対し産業界の視点から見た期待と魅力について語られました。また、「世界では何が起きているか」「日本では何が起ころか」「なぜインドか」「今、なぜ食品科学か」といった疑問について柴田氏の視点が提示され、学生には「まずは飛び込み、チャレンジしてみよう」というメッセージが送られました。



学長記者会見

7月30日

平成31年4月に開設する「インド工科大学グワハティ校 (IITG) とのジョイント・ディグリー (JD) による食品科学技術専攻 (修士、博士) の設置」について、森脇久隆学長が「岐阜大学の将来ビジョン」と関連させて記者会見を行いました。学長による説明後、鈴木文昭理事 (国際・広報担当)・副学長が、IITGとJDを設置することとなった背景と概要について説明しました。続いて、JD専任教員候補者の海老原章郎応用生物科学部教授と柳瀬笑子応用生物科学部准教授から、それぞれの専攻の詳細や立ち上げに際し苦労した点等の話がありました。

本学は、JDプログラムを基盤とした共同研究の活性化や学生及び組織の国際化、岐阜・東海地域産業のJD相手国への進出支援と食品及び関連産業を推進していきます。



ジョイント・ディグリー (JD、国際共同学位) プログラムとは

海外の大学と共同で開設した単一の共同学位プログラムのことをいいます。このプログラムの修了要件を満たした学生には、両大学連名の単一学位が授与されます。本学は、国際化の推進と教育研究力のさらなる向上を図るため、平成31年度に海外協定校のインド工科大学グワハティ校およびマレーシア国民大学とそれぞれ協働し、4つの国際連携専攻の開設を計画しています。

